

五
部
書
集
卷
之
五
十
九

^ 13
3225
9 上



へ 13
3225
9

昭和十四年七月十四日 東京

春色英對暖語卷之十五

第廿九回

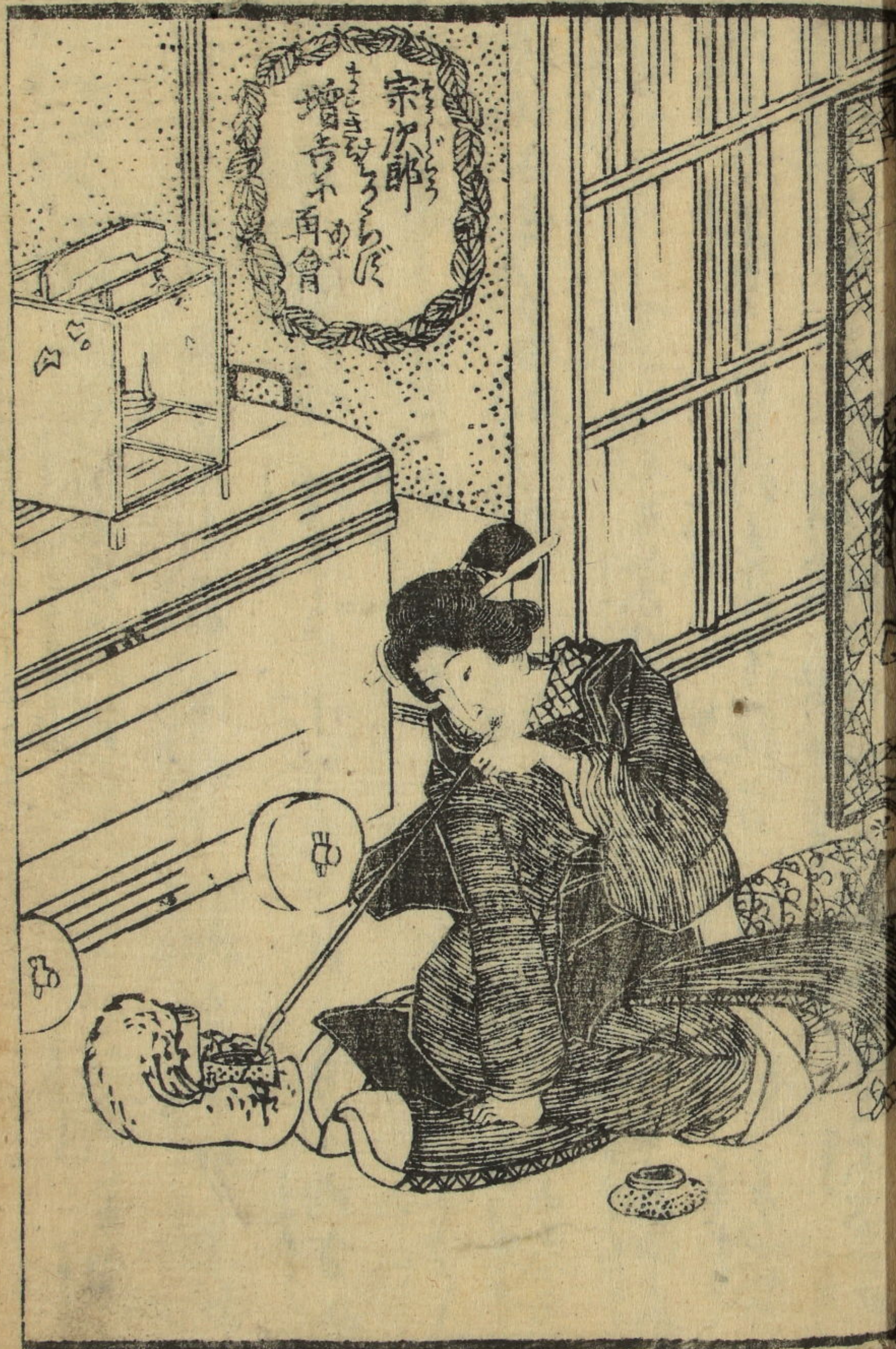
梅の拾遺別傳

本このこもも不ふ施せ痛いたををすすままぶぶ吉きち野の山の花はなのの金かねををよよききるる春はる風かぜ
 とと詠えいまま一いっ圓えん位ゐののおおちちああららねねどどもも織おり本ほん條じょうののいといと重おもきき夜よる
 のの脚あし月つきもも添そ添そすするる花はなのの笑え顔がほふふららりりままぶぶ後あ綿わたとともも着き
 ぶぶよよくくおお痛いたららせせ一いっ家け次じ帝ていおお坊ぼのの時ときをを記しすす久くししがが
 るる比ひ粒つぶもも此こ夜よるをを解とけけ一いっ身みづづかか見み遠とほくくままららるるにによよそ
 るるひひてておお飯いのの支し度どもも朝あ六ろくああららううふふ家け次じ帝ていのの抱まええふ
 寄よ添そひひてて 坊ぼ一いっ家け次じ帝ていららんんくく 毛けすすおお紀し成なりまませんんくく已やしし刺す

冬儀

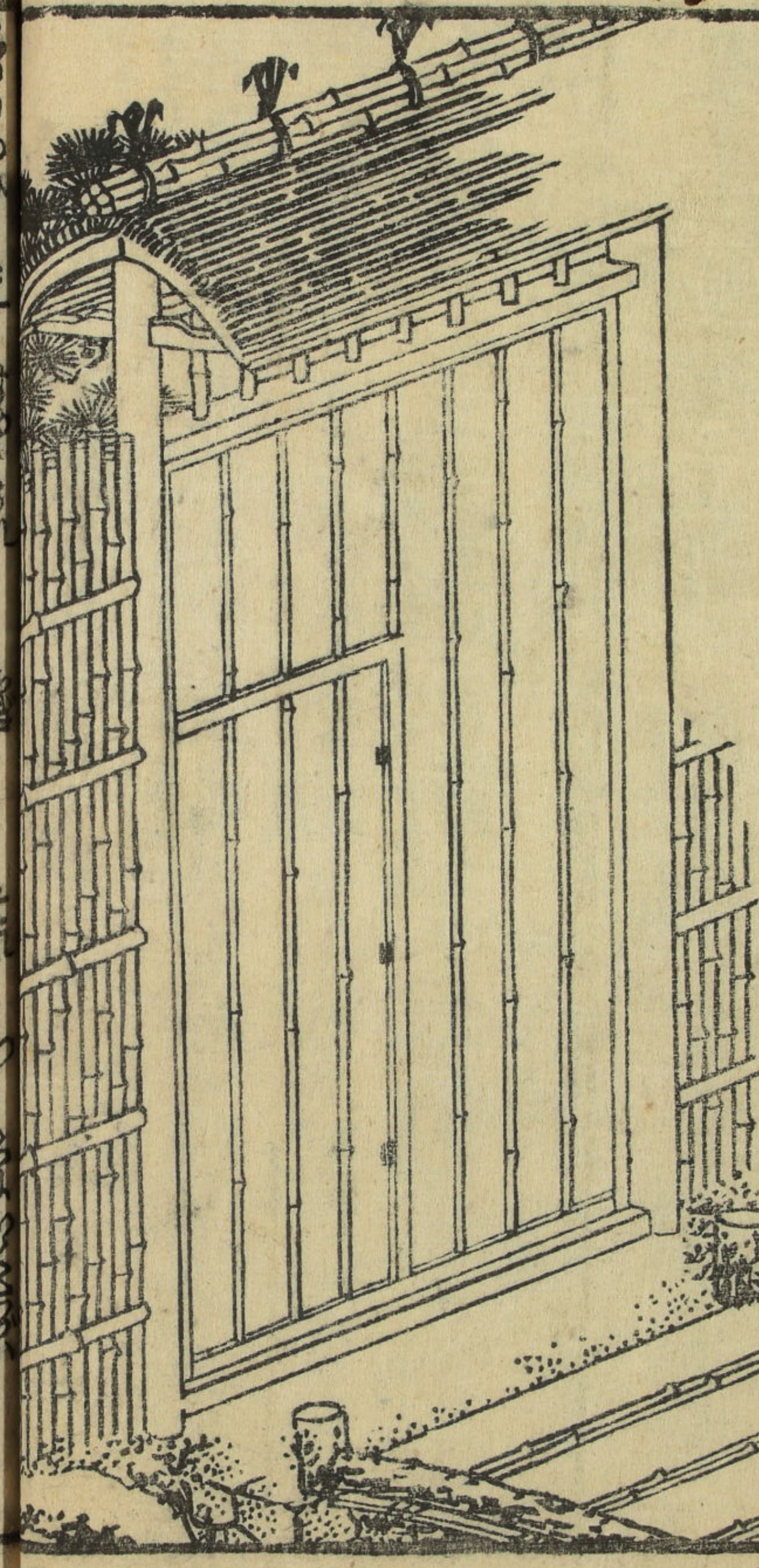
さぞいづれおまたヨトのひらぐらう家次布の顔のよゆう覗き
居る家次布の母とくと目次覺へ
まアア引籠の草臥と
う夜の明このもつらげよ露のヨモリ
ま化粧が
を揺る美舞多うて見せらまのや
今日のけ所を
性まのひせ
まアアサ
まのヨ
まの七
早く紀て浄水とまのこのでありま
て居る
うお茶様小見とまののが
ハサお記
まアア私
のどろ
何程も
何とも
歳と
何

て居る
うお茶様小見とまののが
ハサお記
まアア私
のどろ
何程も
何とも
歳と
何



二女の心を和らげの松の西方へ寔を尽し一さて双方ともゆゆ
娘の乳を薄くし一節増すお柳の中知さるめ
よき籍の増すの中成色もばなす一西方の
請ふる恩もゆきば全く浮薄の度お柳と一くく
湯かさせけるゆゑお柳も増すも恨もくく一お柳の
回答をりて二人とも宗次希成たるにきけるが其申ふ
増すの兄ありける湯も湯も親方へ侍衆一極てまゝ家の
支那人とあり一お柳増すが娘女の勤成止まて宗次希の
合力を請ふるも家再自の大切の中お柳と一まゝ
お柳一とぞきて其間お増すの家次希ふすめてお柳と二
見屋より下げて貰ひ一お柳も増す義理をきて家
次郎の本宅へ入るも増すも同じくまゝお柳と一
郎へ二個の美女を携へる本宅へ男世帯にて目をさすける
さて此頃お柳と一増すのいふお柳は入る
梅おとく己園ふありてゆりまゝお梅おとく發落
の年月が宗次希増すがお柳さんとの被是とせし

お坊お柳の二女と同居さす世帯もせ極が奇くもせだ程
 十世活をまひとそふとるこふをちの若ふとまのり
 一
 一



一圓がはるほの境と髪のかりまの津の國は田川これハ
 東都の湯田川おひひらとん染の山富本と後波の中へ
 ふふぬくく心もゆのも境のあまらぬ桃櫻
 ト申音に終る二枝のニ味線この糸が切てくる止
 東がまひヨ 坊トモクモウ一うけもあつらこつね
 がまひころお継お 柳トモウトウセ又明日ふせう
 坊アくそまぢやア左根せう子トは完尔笑ひ 坊ア
 お前六何とも思ひづら知らまひがけ浮留理の根ま
 まえ 免 おぢい

たうらんとうふ困るいふまに 柳 一ヶ後七時頃いふけるまに
家まうんぐ左様お言ぢやアるひら 大和物語うらひ昔の本
小記であるまにで二人の男が西方とも美男で何れも角も
勝り男がうらひら生田川とやららの水の中お居る鳥を前
射し者の情人おあらしめとらうら西方一度おまを成射
詮方うらひらう西方入ををきてを狭い直ふ川へ身と投
てはまらうらひらおはまらわ入 柳 一ヶ後七時頃いふまに
氣でお存じ御入 柳 一ヶ後七時頃いふまに
お前も松も三平

言松ごま家まんもお困るいふらひらいひらごま松もお茶も
おふお合し七朝晩は松よ押付合て居るうら苦勞方うら
おまのうらあまごまお方一人候おまし七の御見まを
面創しけごまお茶も松も左様いふと自然らうのまを
遠所て控り苦勞せ七まごだけ野暮夜いふひら男
も柳もごま思ひまら 柳 一ヶ後七時頃いふまに
おまの家まへは遠所なまらかうらもひ子 柳 一ヶ後七時頃
でもおひヨ太腹お茶うらあはの候 柳 一ヶ後七時頃

情も愛もあつたまの六宮初お私が廊へ出て帯續けて
私の所へお出の途中でお前不違と申す情人のあつたや
あひつむ〜 坊主〜 七宮お前が振付ておまの帯を
そまのうらあなが後におあせりつておまをとお呼ひの帯ハ
必赤の道をいままでしてはまうてあを見つるま直不途中
駕籠でお赤の所へお出ぢやうあひつ 柳アサ左様おまを
面白ひヨモリ〜 こそ道を言合ひおせりつてエホ

算 卅 回



百年の苦楽他人の依女の身の上の悔〜 今ま
りも古あ〜 けいごも生色〜 形容の長ふつけ悪ま
に情〜 腹〜 道のあれば常不他人のあ
あも〜 七宮お前が振付ておまの帯を
お柳の二人六宮の姉妹〜 も腰〜 定次郎も又両個を
愛して養と日向の金〜 衣類〜 外のもの生も
お柳を同じ〜 して興入〜 け〜 け〜 柳〜 頼

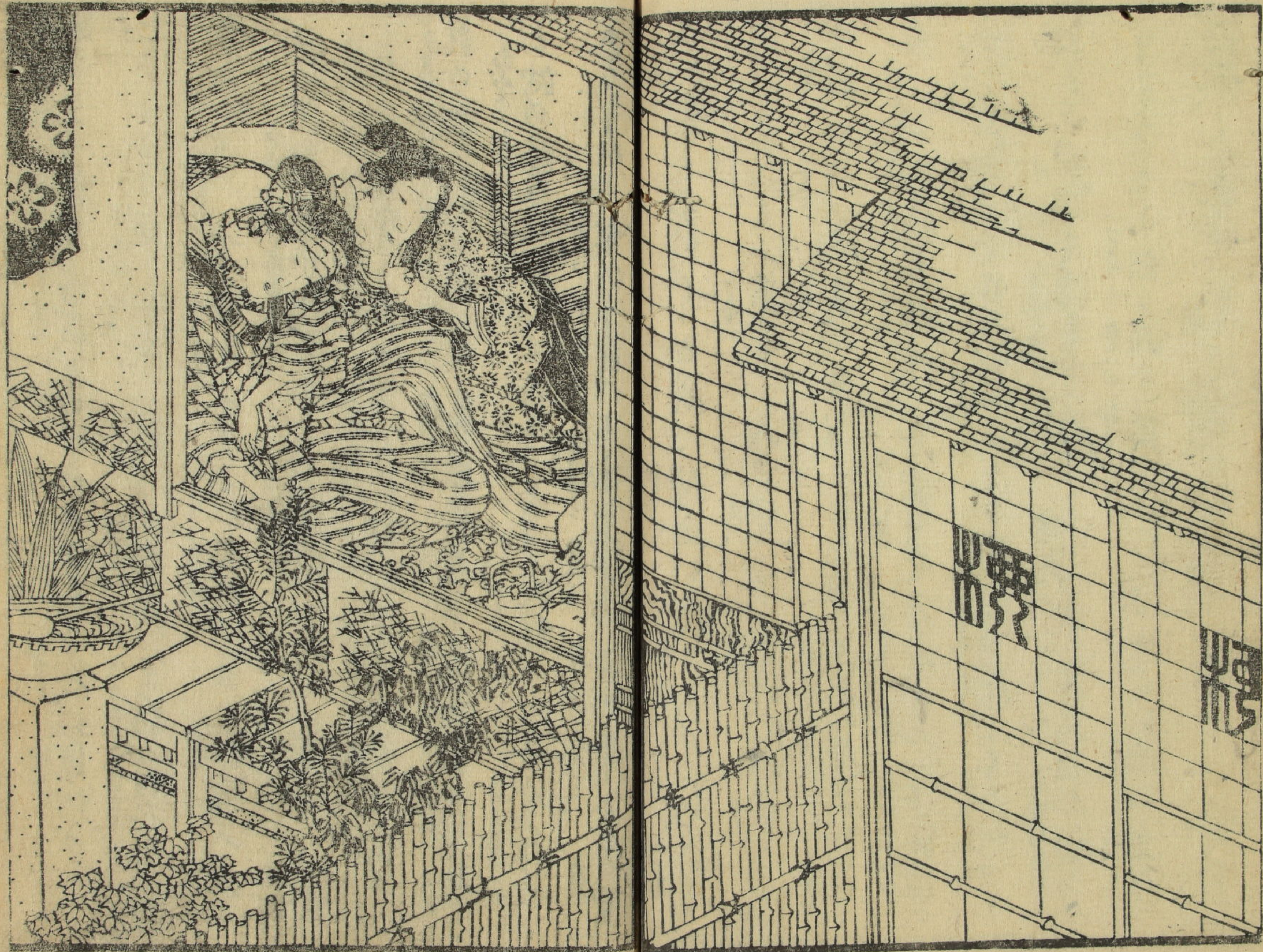
お茶より松より 一身も同様ごと常々小思ひで居るの
ハふとまじごうら おまふ世様も多分さう世様もなうする
のが 當然のまじごうら やうて 違者ふまじごうら お茶の時
小茶一杯が煩くばまじごうら お茶の肴病をうて 貴人ハ子左様
あて見まじごうら も 衆も多分さうら のご 日まじごうら 衆も
氣をのむとあふ 病ふさうら 平氣でおまじごうら 言まじごうら
多茶粉を吸付て お柳のこまじごうら 一サア一ふく おまじごうら
今日は 家さん が お茶の 病氣を 案じて お医師さぬの
度やお茶の善悪も 知らぬと まじごうら 観るお茶
とお言で 松智山の 觀光さんと のみ 上りぬ 人相者の 度
おて おまじごうら ヨト のひまじごうら お柳の 体を 潰れんまじごうら
顔の肉も 落ちの 言まじごうら も 力なく 常々 氣性の 我勝
はまじごうら 元おまじごうら 上りぬと 老い角に 涙を のりぬ 盗行
を流し 一まじごうら 喜まじごうら 風情 ぬおまじごうら お茶も 苦方人
まじごうら 一まじごうら 見まじごうら 日頃のお柳の 身の上 再
度 勤の 苦界の 心死 他人の 下 笑ひまじごうら と 張を

お茶より松より 一身も同様ごと常々小思ひで居るの
ハふとまじごうら おまふ世様も多分さう世様もなうする
のが 當然のまじごうら やうて 違者ふまじごうら お茶の時
小茶一杯が煩くばまじごうら お茶の肴病をうて 貴人ハ子左様
あて見まじごうら も 衆も多分さうら のご 日まじごうら 衆も
氣をのむとあふ 病ふさうら 平氣でおまじごうら 言まじごうら
多茶粉を吸付て お柳のこまじごうら 一サア一ふく おまじごうら
今日は 家さん が お茶の 病氣を 案じて お医師さぬの
度やお茶の善悪も 知らぬと まじごうら 観るお茶
とお言で 松智山の 觀光さんと のみ 上りぬ 人相者の 度
おて おまじごうら ヨト のひまじごうら お柳の 体を 潰れんまじごうら
顔の肉も 落ちの 言まじごうら も 力なく 常々 氣性の 我勝
はまじごうら 元おまじごうら 上りぬと 老い角に 涙を のりぬ 盗行
を流し 一まじごうら 喜まじごうら 風情 ぬおまじごうら お茶も 苦方人
まじごうら 一まじごうら 見まじごうら 日頃のお柳の 身の上 再
度 勤の 苦界の 心死 他人の 下 笑ひまじごうら と 張を

通せし意地づくの勞きもさふあまむとて眠むば夢の
多きより醫師も肝症の勞症のと名を付さむばあ
岐氣もせぬさむばさぞ出さくあろろんと胸の思へば
色ぬも出て竟ホロくと眼の涙お樹の見せごと顔もはけ
次人まんとまろるを叫止め 阿ノお坊さん 昭目お醫師
さぬが完見放しこのうま 坊しとてまねぬさふらひひ
なぞ多其根なるりをお言ご 阿ノま 七言でも完あらんがア
お醫師まあまらぶおわお出の振ふとりの今おあか
私の顔をおけごとと見て涙をおさすの人の命が
保さるごらふ慈愛さるるさ入ると思ひてお果ごら
それでお後のふ遠の身のヨトひひく涙おせらうて泣き
ら 赤穂の松が 完些生て居度おんご子正此松の
おあがやまごくあてお果ごらう 猶のさう死ともさひヨト
ひらきでお坊も泣きまらうり 坊し阿ノサ其根ぬお細のるを
お言ひでさひ松が涙を落しこのへ子まごお赤のさむば
取丸してきておまのへさごらうはほもちやく髪でも

いの中
お医師
さぬが
なぞ多
次人
阿ノ
坊し
昭目
阿ノ
七言
完あ
まら
お出
の振
ふと
りの
今
おあ
か

とら
おあ
ひら
お言
取丸



終てよる程はは度ものごとくおぼる度お思ひがらふと
思ひてツイ圓がせしむる子うらむる言誠苦勞が成
で多のヨ 一五丈でも子お醫師まぬハ何とていふ
まひが何でもい十月のど必果へ子あしとらくと願
と枕えへ何者うまて早く死ねとりの極な妻をのりて子
程の胸へ釘を釘し候 実通に極な妻を見て目が覚
と油の極を行がて居るものヲ何程とても今夜も
あるものゝ思ひましたにト極な妻は淡の雲さも喜
げふ歎き候はせお惚く種くるぐさめて力を付る信切ハ
いと頼母さま実情多るゆやめて家次第へお柳の病
亂と見取とも一目の全候させんと丹城するもたご
巻の傍のそとにだ お柳の再度の勤事ども一と家再興
の大切あまぶ 義理の事も縁末よるゆ神佛の祈り人
相の易者のご親をのり歩ゆし疑ひあるべし續く鬼の
姿も見ゆとていふた人の通の松智山の相者觀光ハ他は
あて家のあまぶが在り方とさく海の道とて大驚味と云

終てよる程はは度ものごとくおぼる度お思ひがらふと
思ひてツイ圓がせしむる子うらむる言誠苦勞が成
で多のヨ 一五丈でも子お醫師まぬハ何とていふ
まひが何でもい十月のど必果へ子あしとらくと願
と枕えへ何者うまて早く死ねとりの極な妻をのりて子
程の胸へ釘を釘し候 実通に極な妻を見て目が覚
と油の極を行がて居るものヲ何程とても今夜も
あるものゝ思ひましたにト極な妻は淡の雲さも喜

言はれぬ事あるものなりおれややお柳さんの病氣は早く
治してよと度と思つて毎日お食事を家で持参して清正庵を
評んで居るのふき松を言はれちやう宜い梅のころに下
咽を落度 母 てもどもお顔がけを別てお柳さんの
家さんが疑はつてお家で見まはれ方があるうら多お柳さんの
病氣が治つてお柳の疑ひが晴らなで兄さんの方へ往つて時
節を治つて居るがうらナ 母 今お柳さん今山家さんが評
てお柳さんお柳さんの病で能お柳の病をいふてお柳さんまで

私を疑つて左様がうらとお柳さんお柳さんがうらとその
病を疑つてお柳さん 實て死んでは年ヨ左様うらバ死人の
疑ひも晴つてお柳さんト覚悟極も一狼の類をいふと
見まはれぬ事あるものなりおれややお柳さんの病氣は早く
治してよと度と思つて毎日お食事を家で持参して清正庵を
評んで居るのふき松を言はれちやう宜い梅のころに下
咽を落度 母 てもどもお顔がけを別てお柳さんの
家さんが疑はつてお柳の疑ひが晴らなで兄さんの方へ往つて時
節を治つて居るがうらナ 母 今お柳さん今山家さんが評
てお柳さんお柳さんの病で能お柳の病をいふてお柳さんまで

春色梅羨婦祿

近日賣中下

作者

狂訓亭

為永春水

校合

狂文亭

春江

狂旅舍

春曉

笑訓亭

春友

画工

柳烟亭

歌川國直

春色英對暖語卷之十五

